
青葉高校HERO部

ジャス太。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青葉高校HERO部

【Nコード】

N8489X

【作者名】

ジャスト。

【あらすじ】

主人公琴吹千花は
HERO部のメンバーの
雨宮早苗、三谷龍、橘歩夢、
そして部長の新條聖と
学園のHEROになるはずが
いろんなトラブルを起こしていく
学園コメディ

こんな毎日（前書き）

日頃の妄想です

初心者なのでいろいろおかしいと思いますが
温かい目でみてやってください

こんな毎日

少しじめじめしてきた頃、

アタシ琴吹千花は

青葉高校1年5組の教室で

理科教師である赤嶺先生の演説を退屈そうに聴いていた

「えー、ですからあ、

皆さんは科学者の卵であり…」

アタシは科学者になる気はありませんがね…

他の生徒も同じ意見のようだ

隣の生徒は手紙らしきものを読んでいるし、

斜め前の生徒は熱心に紙飛行機をつくっている

「先生！授業が暇です！」

あ、言いやがった（笑）

言ったのは斜め前の生徒だ

黒髪でペンダントらしきものをかけている男子

制服のシャツを全開にし、なかに色Ｔシャツを着用している

髪以外は校則にしたがっていない

赤嶺先生は男子に向かって叫んだ

「新條くん！！」

今ちゃんと聞いておかないと、将来困ることに…」

キンコンカンコンコン

よくやったぞ、チャイム

赤嶺先生は少し悔しそうな顔をして、

「では、授業を終了します。

後悔しても遅…」

「きりーっ、れーい、ありがとうございましたー」

委員長まで！！

赤嶺先生はそのまま教室を出て行った…

少しかわいそうだが…

授業もHRも終わり、もう下校の時間だ

たくさんの生徒が部活へと急いで廊下を走る

アタシは部活に入っていないが、

暇が嫌いなのでいつも部活動誘ポスターを眺め、

楽しそうな部活を探す

青葉高校は部活の数が半端なく多い

メンバーさえ集めればすぐ部活として認められる

だから楽しい部活がたくさんあると期待していたが、

ピンとくるものがない

「今日も帰るか…」

とつぶやき校門を目指す

こんな感じで毎日が過ぎていき、

気づけば入学して2カ月がたっていた

こんな毎日（後書き）

誤字脱字などがあればお知らせください
感想など一言いただけるとうれしいです

拉致事件（前書き）

2 話目です

調子乗って投稿しました

――。

拉致事件

いつものように校門へ向かう

校門のそばには大きな掲示板がある

掲示板にはすべての部活の勧誘ポスターが掲示されている

アタシがさっきみたものは一部にすぎないから、

気が向くと帰り際に眺めている

今日はみて帰ろうと思い、掲示板の方へ向かう

すると、今から貼るらしいポスターを大量に抱えている、

ふわふわした栗色の髪を下で2つに束ねた生徒が

目の前で派手に転び、ポスター達が宙を舞った

うわ、これはひどい

彼女はあわててポスターを集めている

アタシは同情して、

「手伝うよ」

と笑いかけてポスターを集め始めた

彼女は涙目でアタシを見つめて、

また黙ってポスター集めに戻った

すべてのポスターを集め終わり

きれいに重ねて、アタシが

「どうぞ」

と両手でポスターを渡そうとすると、

彼女はポスターではなく、アタシの両手をがっちり掴んだ

彼女は下を向いたままだ

「あー、ポスター集め終わ…」

と言いかけると、彼女は顔をあげて笑顔で

「っーかまーえた」

とかわいらしい声で言ってきた

「えっと…人違いじゃないですか…??」

とアタシが言い終わると同時に

「よーし、そのまま連行だー！ー！！」

と叫びながら

花壇の方から葉っぱまみれになった男子が3人でてきた

「うぎゃああああああああああああ」

とアタシが奇声をあげると

2人の男子がアタシの両腕を掴み、

そのまま校舎へと向かった

「ちょあああああ！！??」

人違いですってええええええええええ

だあれかあああああああああへるぷみiiiiiiiiiiiiii」

とアタシが叫び続けるのもお構いなしに

先頭の男子とさっきの彼女はにこにこしている

そばの男子はやれやれといった表情で

アタシの腕を掴んだまま歩きつづける

たくさん部の活生達に

なんだなんだ？と見つめられ、

「きiiiiiiiiiiiiiiiiiiやあああああああああああああ

あああああああ」

と叫び続けながら

アタシは特別棟へと拉致された

拉致事件（後書き）

誤字脱字などがあればおしらせください
感想など頂けると調子に乗ります

ようこそHERO部へ（前書き）

3 話目です

関西弁あんまわかないんで
いろいろミスってると思いますが
スルーしてやってください

ようこそHERO部へ

気がつくときアタシは見知らぬ部屋で

縄で芋虫のようにぐるぐる巻きにされ、

天井から吊るされていた

「○× w@?焦?!wwwwwwww」

とアタシが吠えると

「あ、氣いついたみたいやで」

「このやり方はなかったんじゃないの？早苗ちゃん？」

「このくらいやらないと入部してもらえませんよ」

と何人かの話声がきこえた

すると目の前に4人の男女がでてきて、

先頭の黒髪で人懐っこそうな、1話にも登場した男子が

「そんなことどうでもいいよ。…せーのー!!」

と合図を出して、4人で

「……ようこそ!!HERO部へ!!」「」「」

とハモツた

普通はここで呆氣にとられるだろうが

アタシはすぐくめんどくさかった

え???なに???帰り際に拉致られてこんなバカ達と一緒にいるの??

それが表情にも出たのだろう

4人は後ろを向いて相談し始めた

「おいしい!話とちやうやん!ごつつシラけとるで!!??」

「入部届けにサインさせたら帰してあげると脅しましょう!」

「もう手荒な方法やめよう?心痛んできた」

「とりあえず説明してあげよう!!」

と4人はアタシの方に振り返って、

HERO部について説明しだした

「えつとね？HERO部ってのはね？部活動の一種でね？
基本的にHEROっぽい人助けとかする部活動なんだよ」
と黒髪の男子が言った

「んでアンタはこの早苗が困ってるの見て助けてあげてたやろ？
で、アンタいい奴っぽいからHERO部に入りたいなと思ってな—
少々手荒やけど部室に来てもらたっ—ことや」

と黒髪男子の隣の黒に近い茶髪で関西弁の男子が言った

「んで君にHERO部に入ってほしいの。いいかな？？」

と黒髪で少々ロン毛のチャラ男っぽい男子が言った

「入部届けにサインしないと…」

と早苗と呼ばれた女子が言いかけたところを
チャラ男が女子の口を手でふさいで止めた

「んで…HERO部に入ってください」

と黒髪男子が控えめに言った

アタシはこの部活が気に入ってしまった
この部活なら暇しなかなと思っただ
アタシは4人に向かって

「いいですよ」
と言った

すると4人は大喜びして、

「まじでええん？？ほんま？？ほんま？？」

「拉致って正解でしたね！！」

とそれぞれ騒ぎ出した

アタシは恐る恐る4人に言った

「盛り上がってるところ申し訳ないんですが…
入部するんで縄解いておろしてください」

ようこそHERO部へ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます
また暇なとき投稿します
感想とか一言いただけると
調子に乗って暴れます

とりあえず自己紹介（前書き）

漢検が間近なのに投稿してしまいました
落ちたらシグレさんの活動報告で
愚痴りたいと思います

とりあえず自己紹介

やっと地に足をつけることができたアタシは
部室内を見渡した

壁にペンキらしいものでH A E R O S ! ! !と大きく書きなぐられている

しかもスペルを間違えたらしく、
Aに×がつけられている

アタシが見渡し終わった頃に、

黒髪男子は

「んじやとりあえず自己紹介！

俺は新條聖！みんなのH E R O ! 期待にこたえるために今日も頑張る！！

授業が暇だという事件が起きれば、行つて授業を妨害し
机に落書きが発見されれば、机ごと処分する！！

悩みは…俺の名前は「せい」なのに「さとし」と間違えられること！！

ともかくよろしく頼むよ！千花！！」

と元気よく言つた

途中からはH E R Oではなく問題児になっているが…

すると今度は関西弁の男子が言つた

「俺は三谷龍や！このとうりの関西人や！

聖とは中学から一緒やねん！アンタみたく、いろいろ巻き込まれて入部したんやで

よろしく頼ん」

「あ、ちなみに悩みもちゃんというんだぞ！

苦しみを分かち合つてこそそのH E R Oだぞ！」

聖が龍の話を遮って自己紹介のきまりを追加した

「ええ〜言っんかいな〜」

んじゃ俺の悩みは最近髪の毛がハネてきたことと、
聖のお守がたいへんつつーことや

まあ、よろしく頼むわ」

とめんどくさそうに龍が言った

確かに髪が少しくるところどころハネている
いままでの聖をみればお守がたいへんというのは
どんな馬鹿でもわかるだろう

次にチャラ男が髪の毛を風になびかせながら言った

「んーじゃ、次は俺だねんっ

俺は橘歩夢。学校一のイケメンお兄さん。

よく言われるんだけど、髪を染めてないのは髪が傷むからなの。

悩みは…そうだね、イケメンすぎるこゝ」

「あ、そうだ！名前を呼ぶときはちゃんと下の名前で呼ぶんだぞ！

仲良さげでなんかいいからな！ウン！」

「アンタはいちいち人の話を遮らんとしゃべれんのかいな！！」

と、また聖が遮ったあとに龍がキレた

「……………つづけるね？」

やっぱイケメンすg」

「仲良くしましょうね！千花さんっ！！」

歩夢がつづけようとしたところを、

今度は早苗とよばれた女子が遮った

「ちよつと早苗ちゃん？それ今言わなくていいよね？

俺もうガラスの心粉々なんだけど

ウン。もういいや。よろしくね千花ちゃん？」

と投げキッスまでしてきた

このキマった！みたいな表情がイラっとくる

最後に早苗と呼ばれている女子が言った

「もうわかってると思いますが、私は雨宮早苗です。

特技は拷問（精神の方）。趣味は読書です。

作者の好みのため、黒のニーハイを履いてます。

悩みは、正義のために人を自殺まで追い込んだだけなのに
精神科へ通院させられていることです。

よろしく願います。」

とてもかわいらしい声なのに言っていることが黒い

趣味と作者の好み以外は普通の女子とは思えない

黒すぎる

「んじゃ、次。」

とアタシを指さして聖が言った

「ああ。えっと、琴吹千花です

特技は寝ること。アタシより寝れる人はいないと思います。

趣味…ありません。

暇が嫌いなトコがあります。

よろしく願います。」

と、適当にアタシは自己紹介を終えた

「ウン。その適当なところが千花の特徴だね！」

聖がアタシのすべてを知ったかのようにうんうんと頷く
うれしくないが

「んで、明日も授業が終わったら部活に集合？」

アタシがきいた

「んー、そうだね！明日も授業が終わり次第集合！！

ハイ解散！！」

聖が解散の合図をだした

「おつかれさましたー」

「聖ー、はよ帰ろうやー」

とみんな散り散りに部室を出て行った

最後に聖はアタシに

「明日もちゃんと来るんだぞ！」

と念をおした

さっきまで拉致られて天井からつりさげられていたのに

なんでアタシはこんなに冷静なんだろうと思った

アタシは自分の適応能力に感心した

とりあえず自己紹介（後書き）

最後までご朗読ありがとうございました

漢検のために勉強するんで

次話は土曜日ぐらいにしか投稿できないと思います

帰宅（前書き）

漢検…オワタ

帰宅

ああ、疲れたかもしれない

7時頃帰宅したアタシは、

キッチンから漂うおいしそうなぶりの香りに誘われ、
玄関で履いていたスニーカーを放り投げた

「あらあ、おかえりー千花ちゃん。

今日はぶりとレバ刺しと馬肉よお。」

と、姉の瑠花が甘い声でアタシを迎えた

「おお、おいしそう。

でもこのごついメニューなんか知らないかなー？」

「あら、でもおいしいでしょ？」

「…おいしいけどね？」

いつもご飯は母に代り瑠花姉が作ってくれている
文句はいえないのだ

うちは両親が化石発掘やなんやかんやの仕事をしており、

今は二人ともオーストリアらへんに出張中なのである

なので家にはアタシ達兄弟だけなのだ

今年で20になる保育士の瑠花姉は母の代わりになると頑張っている

髪型をお母さんばい？ハーファップにしてエプロンを着用

メイクもして必ず甘い声で兄弟を迎える

頑張るところがずれているが本人なりに努力している

ちなみにあと2人兄弟がいる

兄と弟がいて、今自分の部屋にいるのだろっ

そろそろぶりの匂いにつられ、駆け下りてくるはずだ

「ぶりの匂いがするうっうっうっうっうっうっ」

案の定匂いにつられてきたのは弟の修叶だ
まだ6年生だが学校でモテている

バスケ部所属の無邪気で明るい学級委員長

そんなに頭は良くないが我が弟ながらモテ男すぎる

「ああ、千花姉おかえり。」

「うおおおお、ぶりだああああ！」

ぶりとアタシではぶりのほうが大事ならしい

こういうところはただの馬鹿なのだが…

アタシにべたべたくっついてほしいというわけではないが、
ぶりに負けるというのはなんだかプライドが傷つく

複雑な姉心だ

「ただいま。」

「おかえり〜。明く〜ん。」

もう部屋へ戻っていると思っっていた兄の明叶が
玄関でだるそうな声をあげながら帰ってきた
瑠花姉はアタシと同様に甘い声で迎えている

「おかえり。明兄。」

修叶がいつのまにかぶりをくわえている
どら猫か

「先に風呂入っていい？」

明兄は修叶を華麗にスルーして風呂場へと向かう
口数が多い方ではないのだ

大学生でPCについて学んでいるらしい
この前学院のPCハッキングしたら叱られたと、
ふてくされて帰ってきたことがある

PC専門だが、アタシの携帯の中身も把握しているのかと
時折すごく不安になってしまう

表情もあまりないので何を考えているかわからない
表情筋を鍛えなおす必要がある

するとすぐにキッチンに戻ってきた

「どうした？明兄。」

アタシが聞くと

「最後に風呂入った奴誰だ？」

と、少し苛立った様子で言った

几帳面だから、おそらくシャンプーでも空になっていたのだろう
明兄は後の人のことも考えて行動しているから、

こういうことがあると少しキレるのだ

いまだにマジギレしたことは無い

「ああ、俺俺！言い忘れてたけど、シャンプーないよ！」

ほら、思った通りだ

「先に言えよ」

と、言いながら修叶に足を掛けて転ばせて、

そのままサソリ固めをした

知らない人はググってみよう

「ぐああああああああ！ごめんって！ごめん！」

必死にギブアップを訴えて、ようやく許しを得たようだ

明兄は最後にチョップをかまして風呂場へと向かった

その後明兄も風呂からでて、

テーブルにも出来上がった料理が並んだ

明兄が手際よく箸を配って、

アタシも麦茶を全員に配り終えて、席に着いた

「いただきます。」

「いただ○ ＊▲…」

修叶は早くもレバ刺しに食いついてて

後半はなんて言ってるのか分からない

「例えば、千花姉今日誘拐されてたでそ??？」

「あらまあ、どうしたの？千花ちゃん？」

レバ刺しをくわえたままの修叶が聞いてくる

瑠花姉はそれほど心配してはいないようだし、きつと遊びか何かと思っているのだろう

「うん。帰りに見たの？」

部活の勧誘で部室に拉致られたの。んで入部した」

「友達ができたの？良かったじゃない」

瑠花姉がうれしそうに言う

「会話する相手がいてよかったな？」

明兄が聞いてくる イラッ

「会話する相手もいなかったでどんだk（サクッ）」

「必殺姉の怒り。眼つぶしver.」

アタシは修叶に眼つぶしを食らわせた

技名を聞いて明兄がツボっている

ぐおおと叫び続けている修叶を無視してアタシはつづけた

「なんかHERO部とかいうボランティア的な部活。暇しなさそうだから入ってみた。」

楽しくなかったらまた辞めればいいし。」

「ふうん。PCについてやることあったら俺に言え。いつでもハッキングして手下送^{ウィルス}つてやるから」

と、箸でアタシを指さしながら言う

「うん。やめとくわ。」

満面の笑みで言い返してやった

風呂に入ってさっさと寝ようと思い、

2階の自分の要塞（部屋）に向かおうとしたとき

「千花。今日サスペンスがある。」

と、明兄が番組表を見ながら報告した

「な、なんですってえ！？予約！予約！」

実は（隠す気はないが）アタシはサスペンス好きなのだ
やっぱ刑事とか科捜研とかかっこいいと思う

「これ、12時までやるけど？」

「ええ！？じゃあ録画！！」

「俺のスパイダーマンでいっばい」

「消せ！スパイダーマン消せ！」

「んだとコラ。スパイダーマンなめんなよ？」

と、命がけの口論の末、

新しいDVDがあつたのでソレに録画した

布団の中に入ってもアタシはしばらく寝なかった

悔しいけど、明兄が言つたように、

話し相手や仲のいい友達ができるのは嬉しかった

クラスメイトというほどの友達は結構いたが、

教室移動のときについて行くだけだった

特別仲がいい友達は過去に何人かだけだった

…仲良くしてくれるだろうか？

いや、でもあんな変わり者の人たちだ

アタシをわざわざ選んだくらいだから仲良くしてくれるだろう

…部室どこだったっけ？

明日迷つたらどうしょ

そんなことを考えながら、

アタシは眠りについた

帰宅（後書き）

最後までご朗読ありがとうございました
やる気がでたらまた次話も投稿します

朝の出来事（前書き）

朝起きてH Rが終わるまでです

朝の出来事

「朝ですよー！！あーさですよー！！
…かーのー？」

「ジャイアントパンダスローク」

かなりウザめの目覚まし時計を

暴力で黙らせて、アタシはようやく布団からでた
完全に目が覚めていないまま、

顔を洗った後着替えて階段を降りていく

1階ではすでに明兄と瑠花姉が起きていて

朝ごはんの準備をしていた

「おはようー千花ちゃん」

「はよ。あの目覚まし音量でかくないか？」

瑠花姉が卵焼きを作りながら言った後、明兄も無表情に言った
あの目覚ましは1階まで聞こえるのか…

朝ごはんの準備を手伝って、

修叶以外が席についた頃、瑠花姉が

「ちよつと修くんおこしてくるわね。修くん！！」

と2階へあがって行った

アタシと明兄は修叶が起きてくる前に

朝ごはんを食べ終えた

修叶が起きてきたのはめざ●しテレビの占いが終わるころだった

「ごめんなさーい。今日の12位はみずがめ座のあなた！！」

いろんなことに気付かずにミスを起こしそう！

ちゃんと周りを見渡して！

ラッキーポイントはうさぎのう●こ！！

それでは良い一日を！」

朝からう・こときいて良い一日がおくれるのだろうか
12位だし、う・こだし、見なきゃよかった

「いつてきます。」

アタシは鞆を持って家を出た

まさか田中さん家のうさぎのう・こ踏むとは思わなかった

靴を履き替えて、再び学校へと向かった

玄関の方で龍に会った

「おお、千花やん。はよお。」

「おはよ。」

「ほな、はよ教室行こうや。」

早苗ももう来てると思うで。」

「龍は何組？」

とアタシが聞くと、（　　）はあ？ という表情になった

「…HERO部は全員5組や。」

気付いてなかったんかいな？」

「そーでしたっけね。」

適当にごまかした

こんなにキヤラの濃い人たちが同じクラスにいたのに、

アタシは一人にしか気付かなかったのか…

「今日な！占いで変なのやってん！」

妹が12位でだからう・こ踏むゝって母ちゃんに泣きついてんねん！

あほらしくて母ちゃんも俺も笑ってたわ！」

その占いはモノホンなんだよ…

アタシはいつの間にか目が死んでいた

「……踏んだんか？」

「………」

そんな話をしているうちに
教室についた

何人かすでに来ており、少しにぎわっていた
窓際で早苗が座って読書をしていた

やっぱ黙ってる则可愛らしい

こっちに気付いたらしく、本を置いてアタシ達のところに来た

「おはようございます。千花さん、龍さん。」

「おはよ。」

「はよ。」

あいさつした後、席に行って準備を終えた

今気付いたが、早苗の席は後ろで、龍の席は隣だった

とりあえず早苗に

「何読んでたの？」

と聞いてみた

「江戸時代の拷問の本ですよ。」

興味があるんですか？」

と微笑んで答えた

「い、いや……」

答えにつまったところ、

「おはよう。麗しいお嬢さんたち。」

と歩夢が声をかけてきた

多少キザだがタイミング的にはナイスだ

「歩夢。」

まだ聖が来てへんのやけど、会わへんかった？」

と、隣の龍が歩夢に聞いた

「会ったら一緒に来てるって。」

歩夢が言った

まあ、そうだろう

「そろそろHR始まりますよ。」

聖さん今日は遅刻ですかね？」

早苗が言うつと、担任の亜子ちゃんが教室に入ってきた
亜子ちゃんは今28だが、童顔で若いイメージがあるので
生徒には亜子ちゃんと呼ばれている

「じゃあ、HR始めます」

と亜子ちゃんが言うつと、生徒達が席に着いた
歩夢も早苗の隣の席に座った
こいつもこんな近くにいたのか

「きりーつ、れーい、おはようございませう。」

委員長が号令をかけた

亜子ちゃんが

「ハイ、出席確認して。」

と言った。

出席係が

「えーと、男子は新條さんがまだ…」

と言いかけたところ、

バターーーーーと

大きな音がした

入口をみると、聖がドアを倒していた

わざわざスライド式のドアを倒して教室に入ってきた

「よっしゃ、ぎりせー…」

亜子ちゃんがすごい形相で睨んだからだろう

聖は黙ってドアを直してアタシの斜め前に座った

「…続けて。」

と、亜子ちゃんは出席係に促した

「え？あ、はい。男子全員います。」

「女子も全員います。」

出席を確認した後、聖はアタシ達を見て
渾身のドヤ顔をした

なんだその自信に満ち溢れた顔は

「聖はあとでこっち来い」

亜子ちゃんが冷たい声で言い放った
でしようねwww

朝の出来事（後書き）

最後までご朗読ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489x/>

青葉高校HERO部

2011年10月29日15時09分発行